

# 新入生への「スタディスキルズ教育」システム

玉置 寛 西原駿一郎 山口信次 原田 淳 武田光由 杉田彰久  
丹羽昭男 水科晴樹 永井博之 伊藤綱男 山崎和雄 中山護邦

高知工科大学工学部 教育講師室  
〒 782-8502 高知県香美郡土佐山田町宮ノ口 185

E-mail : yamaguchi.shinji@kochi-tech.ac.jp

**要約**：高知工科大学工学部教育講師室は2003年度より発足し、12名の教員により、新入生を対象に少人数教育を実施してきた。その概要及び評価を主体に報告する。今後のたえざる教育改善により、学生を来たるべき社会に活躍できる人材として育成してゆく。

**Abstract** : Kochi University of Technology started Study Skills' education for freshmen in 2003. This report showed the experiences and evolution of effects. The themes are productive work, field research work, experimental and handy craft work etc. The results of students' ability are evaluated quantitatively and connected to the students' carte. We started Study Skills 2 to the disqualifications of Study Skills 1. This was planned for the students life style support and completion of works.

## 1. はじめに

高知工科大学では新入生に対して、スタディスキルズ(以下SSと略称する)を2003年度より実施している。本報告はこれまでの取り組みと改善点、評価、反省点等を紹介し、大学での新入生導入教育のあり方の一方法を示すことを目的としている。

## 2. スタディスキルズの目的と意義

近年大学への入学者の学力、生活力、性格などの特性は種々の要因より大きく多様化し、中には大学での学び方、社会生活への適応に戸惑

う者も少なくないのが現状といえる。一方社会は大学に対して、社会が求める能力を備えた優秀な人材を送り出すことをこれまで以上に期待している。このニーズに的確に応えてゆくためには、今までにない教育上の工夫を求められる時代になったといえよう。

学生の成長は1年前期での成績に大きく依存することが経験的に知られている。そのため優秀な学生をより多く育てて社会に送り出すためには、入学時の導入教育が大きな意義を持つてくる。我々はこの課題に正面から取り組むために、下記に述べるSS教育を行うこととし、

2003年度より実施してきた。さらに今年度からはSS単位を取得できなかった学生に対して個別教育を行い、きめ細かくスキル向上を図るスタディスキルズ2の講義も開始した。これらの取り組みにより学生全体のスキルアップを図り、学習意欲と社会で活躍する意欲を付与することには大きな意義があると考えている。

### 3. スタディスキルズ教育の方法と内容 (図3-1参照)

#### 3.1 班編成と講義時間

学生ごとにきめ細かい指導を行うためには、できるだけ少人数で班編成をすることが望ましい。一方教員数との兼ね合いもあり、1班12名程度を基本として編成し、1年生全体で計40班とした。講義は各班とも週1回1コマとし、1クオーターで10コマの講義を実施した。そして同じ班構成のまま教員を替えて、次のクオーターも同じ時間数の講義を実施した。

#### 3.2 担当教員

本講義を専任で担当する教員を「教育講師」という呼称で公募により12名採用した。大半が55歳前後で、教育に情熱を持つとともに企業で活躍した経験を有している。

#### 3.3 狙いと講義の方法

上記目的を達成するとともに、とりわけ次の9種のスキルを積極的に付与させることを狙いとした。

[読む、書く、話す、聴く、議論する、考える、疑問を持つ、調べる、発表する、の各スキル]  
その方法として、座学での講義形式では効果的な教育は困難と考え、各教員が社会生活の経験から学生に熱く語れるテーマを選定し、演習を主体としてその達成を図らせ、上記の狙いを実現してゆくこととした。教員は学生が自律的に調査し考えることを促すことに主体を置き、タイムリーなアドバイスをすることに心がけた。

**3.4 テーマの例：**上記の考えで、教員ごとに個別に設定したテーマの例を示す。

- ・紙飛行機を飛ばそう。(紙飛行機についての考察)
- ・身近な製品をもとに、アイデアを出し品質機能展開を行い、新製品を考える。
- ・陶器を作り、陶芸を科学する。・橋梁の模型を作り、橋梁作りの原理を考える。
- ・商品を企画する。
- ・プリント基板はアイデア発想の宝庫だ。
- ・会社の仕組みを理解する。・読書は楽しい。
- ・ロボットの動作について。・身近な工学の問題。
- ・エネルギー (ミニ風力発電機の製作)。
- ・原子力発電のエネルギー、環境、原子力の観点からの考察。
- ・飛行の原理。
- ・町を歩き、問題を発見し、解決策を提案する。
- ・対立する題材を選び、調査、論理構成し、発表する。

### 4. 教育の効果とその評価

このような教育の効果を的確に測定することは容易でないが、次のようなデータを採取することにより評価を進めている。

- ・学生へのスキル評価調査 (獲得度の4段階評価)
- ・学生へのアンケート (1年生、及び講義後1年経った2年生)
- ・学科教員へのアンケート
- ・学生による授業評価
- ・受講後の単位取得数等の指数の変化

これらの分析評価には時間を要するが、現時点ではおおむね目的としたスキル付与は果たしていると考えている。また各学科の教員からの評

価も概ね好評である。

さらに、少人数教育で教員が個々の学生に細かく対応できる点から、問題学生の生活改善指導が的確に行えることも評価されている。



図 3-1 スタディスキルズの紹介 (ポスター) 2004 年 9 月

## 5. 2004 年度の改善点

2 年目となる 2004 年度に改善を図った主要点を列記する。

- ・クォータあたり 7 コマから 10 コマの時間数増加による演習内容の充実
- ・学生の読む・書くなど 9 能力の具体的かつ経時的評価の実施
- ・人間力自己評価アンケート、危険度チェック自己評価アンケートによる学生の意欲や問題点の把握
- ・学生カルテの作成
- ・SS 単位を取得できなかった学生に対し、2 学期にスタディスキルズ 2 (SS 2 と称す)

の実施

- ・企業見学会の企画と実施
- ・教育講師の 9 名から 12 名への増員
- ・教育設備の改善 (部屋の改善、教育講師専用ファイルサーバの充実等)
- ・Web ページの作成による学内外への情報発信

## 6. スタディスキルズ教育の総合評価

まず、総合評価に入る前に、学生の成績が 1 年の前半で決まってしまうという事実の検証を行い、SS 講義の重要性を確認する。(図 6-1)

学生の 4 年間の単位の取得状況 (年度と単位取得数) を、2004 年度の知能機械の 4 年生について 4 年 4Q の時点で学生を上位から下位に 7 グループに分けて、線を引くと、上位グループは上位グループのまま、下位グループは下位のまま、4 年間で交差することが少なく、推移していることが判る。このため、1 年生初めでの SS 教育が動機付けとして、非常に大きな意味を持ち得ることが判る。下位の学生にやる気と自信を少しでも付与することにより、レベルアップさせることが重要となる。

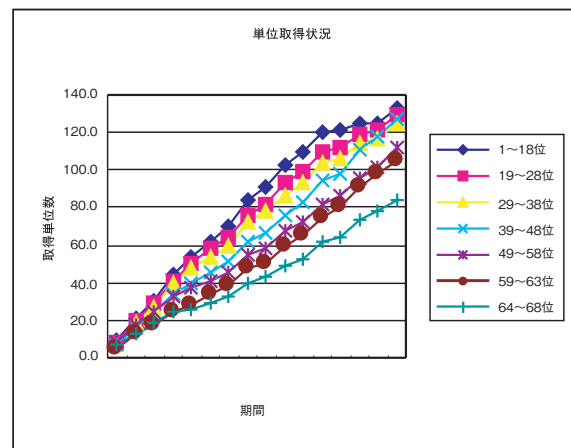


図 6-1 グループ別のクォータ毎の取得単位推移 (履修グラフ)

## 6.1 当初の目標（学生の9つのスキル）に対する自己評価

### 6.1.1 学生のスキルの自己評価

SS 講義を受講している全学生（2004 年度）に対して、9つの SS スキル評価を 1Q から 2Q にかけて 4月、6月、8月の3時点で、同じ人にアンケートを試みた。

1) 学生の9つの SS スキル自己評価結果（全学科 397名）

SS で狙いとした9個のスキルを各学生が SS の講義を通してどの程度獲得したと意識しているか、自己評価させた。その調査の方法を以下に示す。

- ① SS スキル調査票により、各スキルの獲得状況を1スキル毎に5個の具体的な質問を通して4段階で自己評価させる。
- ② 記入された値を各スキルごとに平均を求め、さらに全学生の平均を求める。
- ③ この調査を SS の 1Q 講義開始時、1Q の終了時、2Q の終了時の3回実施する。このとき後2回の記入時には、以前書いた内容を参照させない。

図 6-2 に異なる調査時点における各スキルごとの差分（スキル獲得値）を示す。前回の記入結果を参照していないにもかかわらず値が増加していることは、平均してスキルを獲得したと考える学生が多いことが分る。ただその獲得の程度は、最高でも4段階のうち約0.5段階の向上としか意識されていないこととなる。さらに読む、聴く、深く考えるといったスキルの獲得意識が低い理由と対策は今後検討してゆく必要がある。特に1Q前後でのスキル獲得でスキルごとに大きな差が見られる点も今後の検討課題といえる。

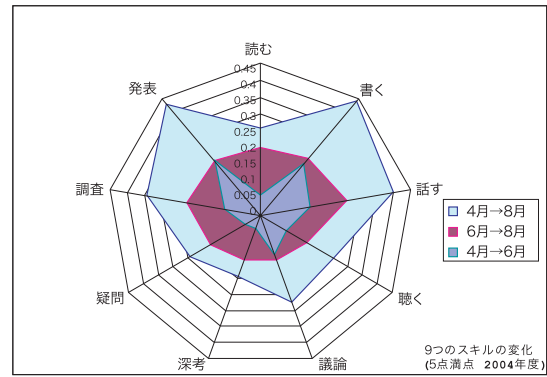


図 6-2 9つの SS スキルについての学生の自己評価の平均

評価：これによると、書く、話す、発表する、議論する、調査するの4スキルが特に向上していることが判る。SS 講義に関して学生がそれぞれのスキルをどのように評価したか、その効果がどうであったかが判る。

### 6.1.2 SS 成績と学生の取得単位の関係

1) SS の成績（意欲の指標に近い）と取得単位の関係 (1)

学生の意欲が高ければ、SS の成績が良くなる。SS の成績が良い学生はクォータ毎の取得単位も上昇するはずであろう。これを検証してみる。図 6-3 は 2004 年度 1 年生全学科（8 期生）の 3Q 終了時点の取得単位と SS の関係である。

これによると、SS 成績は 100 点満点、取得単位数は年間 48 単位という制限があるため、図の形が縮退しているが、ほぼ比例関係に近くなっている。

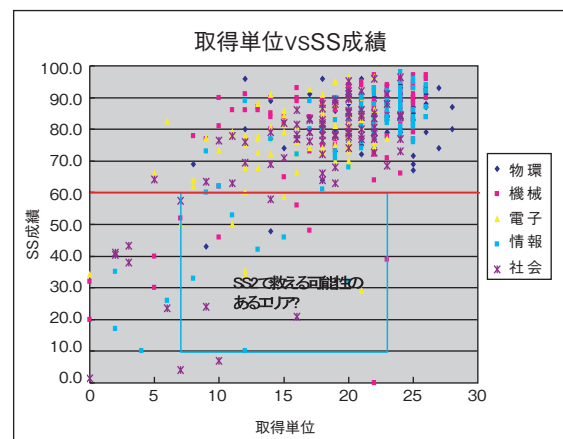


図 6-3 新入生（8 期生）の取得単位と SS 成績



## 2) SSの成績と取得単位の関係(2)

取得単位を長期で見てみよう。

図6-4は2003年度の学生(7期生、現在の2年生、知能機械)で検証してみる。

これによると、SSの成績と取得単位の関係は1年の4Qでも、2年の3Qでもほぼ比例関係にあることが判る。

次に、情報の学生の例で見てみよう。(図6-5)

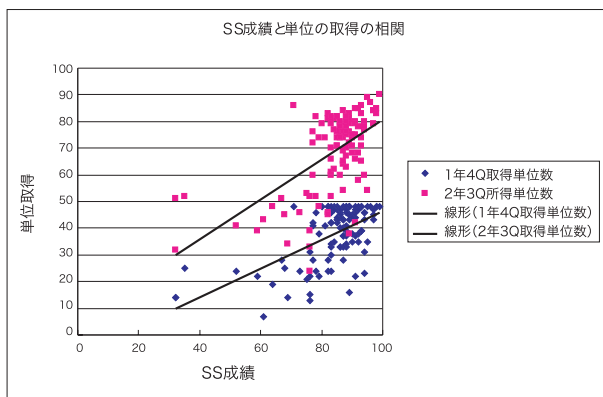


図6-4 知能機械2年生(7期生)のSSの成績と取得単位数の相関

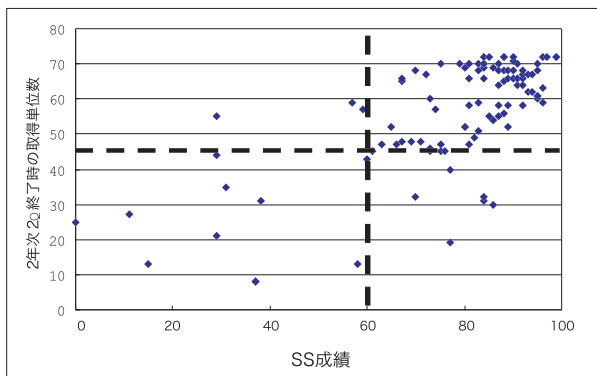


図6-5 情報2年生(7期生)のSSの成績と取得単位数の相関

これでも、バラツキが若干大きいですが、ほぼ比例関係になっているように思われる。

次に、現在の情報2年生の取得単位の伸び状況をSSの成績と関連づけて、見てみよう。

図6-6のように、SS成績の良い学生は取得単位の上昇率の傾斜(感度)が高く、SS成績の悪い学生は取得単位の上昇率(感度)が低いことが判る。すなわち、SS講義で高い成績を取れるよ

うに、指導してゆくことが重要であるように思われる。

これは、SSの成績付けの基準が学生の「意欲」「最後までやり遂げる」「行動実績」「生き抜く力」を評価しているの、対応がつくのであろうと推測される。

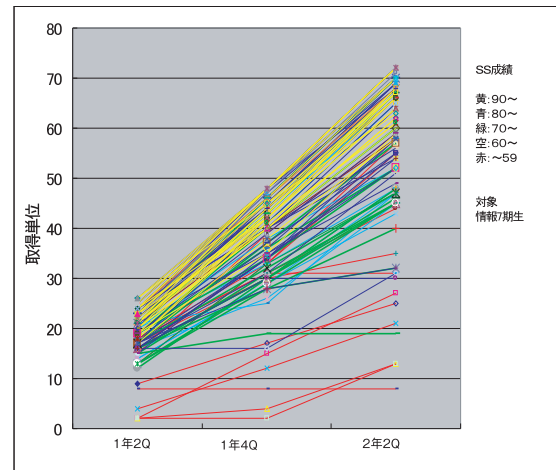


図6-6 情報の2年生(7期生103名)のSS成績別の取得単位の増加傾向図

## 3) 1Q、2Q別成績と総合成績の関連

学生の1Qの成績・出席、2Qの成績・出席と総合成績との関連を調査した。(表6-1)

表6-1 成績と出席の評価

### 成績

1Q	2Q	Total	人数	%
×	×	×	12	2.4
×	○	×	0	0.0
○	×	×	17	3.4
×	○	○	0	0.0
○	×	○	15	3.0
○	○	○	458	91.2

### 出席

1Q	2Q	Total	人数	%
×	×	×	19	3.8
×	○	×	1	0.2
○	×	×	23	4.6
×	○	○	2	0.4
○	×	○	15	3.0
○	○	○	442	88.0

クオータごとの成績は30点未満を×、出席は2/3未満の出席を×とし、その他を○とした。これより次のことが言える

- (1) 1Qの成績・出席不良のものは立ち直ることがほとんど期待できない。
- (2) 1Qの成績が良好で2Qの成績が不良のものには、総合的に不合格が多いものの、合格するものも相当数いる。
- (3) 2Qで成績不良となる学生が相当数いるので、これを早期に見分けて早い対策を行うことが必要である。

## 6.2 スキル評価・アウトカム評価

SSのスキル評価・アウトカム評価として、学生の自己評価だけではなく、客観的な評価を得るものとして外部の方々に評価をしてもらった。

### 6.2.1 学科教員によるアンケートの実施

SS開講前の学生（6期生まで）と、SSを受講した学生（7、8期生）についての比較をお願いしてみた。（図6-7）

1) スタディスキルズ開講以前の学生との比較  
電子・光システム工学科の教員（回答者12名）による、SS開講前（6期生まで）後（7・8期生）の学生の能力を比較すると図6-7である。発表する、議論をする力は上昇していると、学科教員は評価している。8期生にくらべて、7期生の方が上昇度が高くなっている。ただし、比較は困難であるとのコメントも多数あった。

2) 電子・光システム工学科以外の教員（24名）による記述式による学生への評価

○不明：13名 変わらない：2名  
肯定的評価として以下のようなものがあった。

○レポート提出率は上がった ○明らかな手抜きレポートが減った ○活発に意見を言う ○レポートの出来が良くなった ○出席率が上がった ○受動的な学生は減っている  
○読む力・考える力がついたのでは ○発表能力が上がった ○向上心を持っている  
一方で否定的評価 ○学生に活気がない、というのもあった。

3) 7、8期生と以前の学生と比べて、上記9スキル以外に何か変化が見られるか。（全学科教員36名）

○不明：5名 出席率が上がった：3名  
特に変化なし：4名  
肯定的評価： ○学生が教育講師に親しんでいる ○元気がある  
否定的評価： ○授業中の学生の反応が悪い ○優秀な学生が減った ○人間力が落ちている ○学生の質は上がったが学科の入試難易度の上昇のためだと思うとの意見もあった。

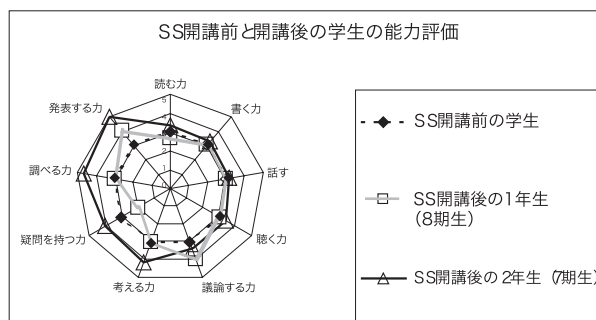


図6-7 電子・光システム工学科教員によるSS開講前後の学生の9つSSスキル能力比較

4) 下位学生のレベルを上げること、上位学生を更に伸ばすことのどちらを期待するか。（全学科教員36名）

○両方：3名、下位学生：19名、中位：1名、中位と下位：2名、中位と上位：1名、上位：4名

○学力ではなく興味分野別の指導を望むとの意見があった。

5) 学力ではなく人間力という観点で育成すべき点はあるか。(全学科教員(36名))

○忍耐力・努力：3名 積極性：5名  
コミュニケーション力：2名 礼儀などの人間性：7名

○企画力 ○劣等感を取り除くこと  
○まじめさ ○勤労意欲 ○友達作り

6) 教育講師への要望事項(全学科教員(36名))

○現状で十分(特になし)との回答が最も多く8名あった。

その他の意見として以下のようなものがあった。

○最も重要な読む力、書く力の教育に重点をおいてほしい、○問題があれば学科教員にも提示してほしい、○学科教員も含めた教育検討会があればよい、○一年から就職まで学生の援助を望む、○学生の生活習慣についても指導をしてほしい、○目的意識を持たせてほしい、○クラブ活動の指導をしてほしい、○高校生向け体験入学イベントを担当してほしい、○基礎学力不足の学生に対する補習(算数、物理)、○専門教育にもSS同様の「手取り足取り」の指導を望む学生もあり、導入教育であるSSと専門科目教育の違いを認識させてほしい、との意見があった。

### 6.2.2 現在の2年生に対して、SSの講義の有効性についてアンケート

SSを受講した後、約1年半を経た時点でのSSについての評価アンケートを全学科学生(7期生)に実施した。(2005年1月実施、回答者

数318人)

1) SSによって向上した能力(図6-8)

学生は調べる、発表する、考える、話す、書く能力が上がったと認識している。

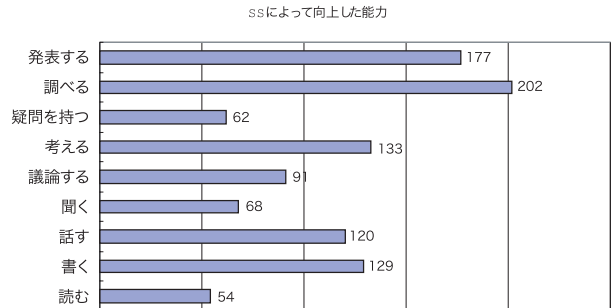


図6-8 学生がSSによって向上したと考える能力のアンケート結果

2) SSは他学科科目学習に役立つか?(図6-9)

半数弱の学生は役に立つと考えている結果である。

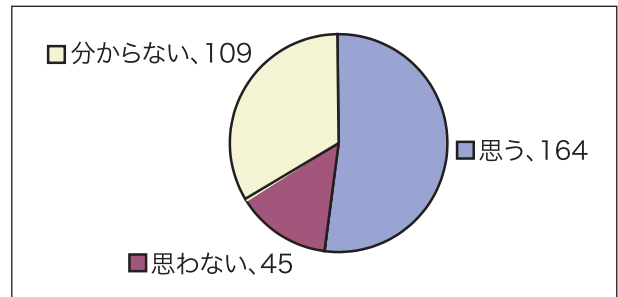


図6-9 学生はSSが他学科科目学習に役立つかのアンケート結果

3) 役立った点はなにか?(図6-10)

教員に親しむ、大学生活に慣れる、友人作りに大きな効果があると、学生は認識している。

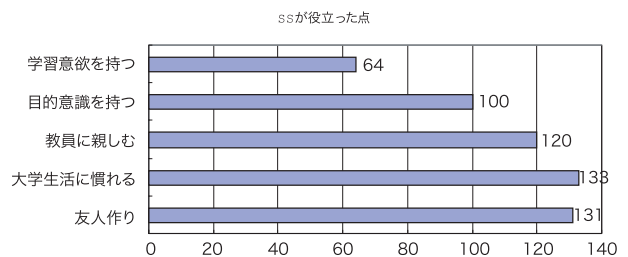


図6-10 学生がSSが役立ったと考える点についてのアンケート結果

#### 4) SS は新入生にとって必要か？ (図 6-11)

半数強の学生は新入生にとって SS は必要であると考えている。

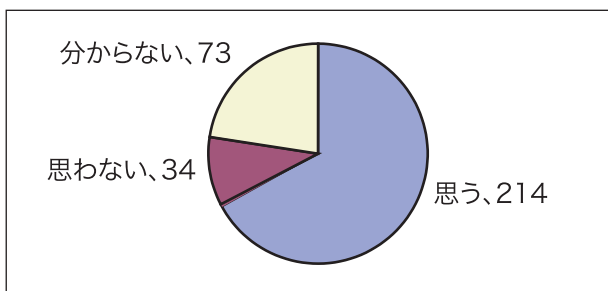


図 6-11 学生が SS は新入生にとって必要であるかのアンケート結果

### 6.3 学生の授業評価による分析

学生による授業評価の結果は図 6-12 のごとく表される。横軸が時間で、縦軸が授業評価値 (0 ~ 4 の評価値) である。

問 1 教員はこの科目の達成目標を明確に示しましたか？
問 2 教員は学生がその目標を達成するために努めましたか？
問 3 あなたにはその目標達成のために努力しましたか？
問 4 あなたはその目標を達成でき十分な力がついたと思いますか？
問 5 この科目はあなたの今後の学生生活や社会生活に役立つと思いますか？
問 6 この科目あるいはその関連分野が好きになりましたか？

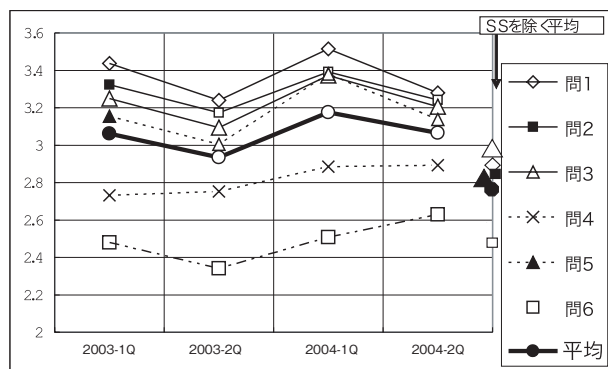


図 6-12 スタディスキルの授業評価

これをもとに次のように分析した。

- ・ 1Q に比べ 2Q は全体的に低下する傾向にある。
- ・ 平均値で見ると、前年度に比較して今年度は改善が認められる。
- ・ とくに問 4 で力がついたと認識をするものが、2Q の全体的な低下傾向にかかわらず、若干でも上昇しているのは、大きな改善と考えられる。
- ・ 問 1 のように教員側の努力が必要な項目は、とくに 2Q の講義の中でもより努力する必要がある。
- ・ 全科目の平均と比較すると SS は高く、実験科目と比較すると、やや低くなっている。

### 6.4 教育講師室の利用評価

教育講師室の学生の利用状況を学生が記入した利用記録から見てみる。記録しない学生もかなりいると思われるが、記録ベースでは下記である。(図 6-13)

期間	2004 年 5 月 27 日 ~ 2005 年 1 月 19 日
記帳した利用学生数	1270 名

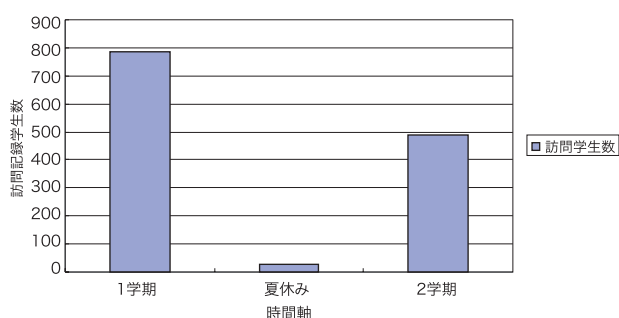


図 6-13 2004 年度教育講師室訪問学生数

この図では 4、5 月の分が含まれていないが、特に 1 学期の利用が多いことがわかる。オフィスアワー制度が学生に十分には認知されていないことを考えると教育講師室は学生の駆け込み寺としての機能を果たしているといえる。



今後、利用目的、用途などの分析を進めたい。

## 7. スタディスキルズ2の企画と実施

### 7.1 企画内容

#### 7.1.1 スタディスキルズ2開講の目的

昨年度よりスタディスキルズの講義を開講したが、最後まで課題を成し遂げることができず、1Qあるいは2Qの途中でリタイアしてしまう学生が、受講者全体の8%程度ではあるが存在する。

こうした学生は、今後の大学生活においても学習意欲を持つことが不十分で、将来、卒業単位取得あるいは就職に困難が待ち受けていることが予想される。

そこで、昨年2学期より教育講師室で、こうした学生への対策を検討した結果、SS1の単位を修得できなかった、あるいは履修しなかった学生を対象に、学習意欲を向上させることを目的として、本年度より2学期に「スタディスキルズ2」を開講することとした。

SS1の単位が修得できなかった者の中には、もともと他科目を含め履修意欲の全くないものも見受けられるが、学ぶ意思はあるものの自ら進んで学習に取り組むことのできない者も多いと見られる。

SS2では、専門により近いものづくり等の体験を自らの力で行わせ、小さくとも成功体験を積み、自らの力で前に進むきっかけを与えることに重点を置くこととした。

#### 7.1.2 指導方法

指導には、原則として対象学生の学科の教育講師があたることとした。

また、履修指導は各学科ごとに教育講師が対象学生と面談するのはもちろんのこと、学年担任、教務担当、アドバイザーなどから履修指導の際に、対象学生にSS2を履修するよう勧告をお願いすることとした。

#### 7.1.3 シラバス

SS2のシラバスにおいて、講義目標はSS1と同じ内容を掲げた。講義の内容が、より実践的な演習主体である点がSS1との相違点である。また、SS1では2/3以上出席することを単位付与の条件としたが、SS2では、すべて出席することを条件とした。

成績の評価は、演習30点、成果（レポート、発表、作品等）40点、積極的に取り組む姿勢（積極性）30点とした。

#### 7.1.4 課題テーマ

- ・ テニスの科学 / 飛行の科学を考える。
- ・ ロボットの基礎を学ぶ。
- ・ パソコンを作って楽しもう。
- ・ 光触媒と生分解性樹脂の実験。
- ・ エレホビー作品の試作と計測。
- ・ 数学・物理の勉強会。
- ・ 鳥の飛行原理。
- ・ 物部川の現地を歩き河川と地域の関連を考察する。
- ・ テーマを決めず意欲がもてる課題を話し合い、決定する。などである。

なお、SS2は、対象者が少数に限られることから本年度の時間割上では、集中講義の枠に配置されている。実際には、担当教員と履修者の都合のいい時間帯に講義時間を設定して、週に1コマ、ないし2コマ程度を定期的実施、あるいは、土曜日などに集中講義的に実施した。

## 7.2 実施結果

### 7.2.1 実施経過

履修者は、SS1の単位取得ができなかった者であるが、本人が1学期の反省をもとに講義にのぞんだり、履修に際して面談指導を受けることによって、受講意欲が改善した学生も少なからずいた。

また、本来の対象者以外に、課題に興味を持ち自己研鑽のために参加した上級生がおり、意欲的に取り組む姿勢が見られた。

一方、積極的に取り組むことができない者や、出席しない者も残されたのが実状である。履修者32名中、合格者22名という結果となり、合格率は69%にとどまった。SS1の合格率92%と比較すると低い数値である。

### 7.2.2 現在までの問題点

SS1の単位が取得できなかった学生が対象なので、事前に若干の困難は予想された。実際にSS2を実施するうちに以下のような問題が明らかになった。

まず、SS2に関する説明会を行う旨の掲示を出したにもかかわらず、呼び出しに応じない学生が少なからずいた。対象学生45名に対して、履修しなかった学生は13名おり、未履修率は29%となった。

次に、履修したものの、出席しない、あるいは、呼び出さないと出席しないという学生が予想外に多い。こうした学生への対応には相当に時間と手間がかかる。

また、学生の都合に合わせて実施するということもあり、そういう部分でも、教員は個別に対応せざるを得ず、開講前に想定していたより、はるかに負担が多くなっている。

### 7.3 今後の課題

SS2の未履修率が高いこと、また、合格率がSS1に比較して低いことから、従来の知見どおり、入学して半年の間に意欲を持たせることが重要であることは間違いないと思われる。

したがって、来年度、1学期に実施するSS1では、より細かなフォローを行い、早期に学生の意欲を向上させることが必要である。

一方で、SS2を通して非常に意欲的になった学生がいたことを考えると、2学期にSS2を実施することにも意義があると思われる。

SS2の履修指導、課題、講義内容などについては、継続して検討する必要がある。

### 7.4 実施結果の感想等

学生より、①大変だったけど、頑張った。②面白かった。等の感想が出され、積極的に努力する姿勢がついたとの自己評価がなされた例もある。

ある学科では、講師から指導が大変であるとの声も聴かれた。

## 8. 特色GPの採択と新入生教育 シンポジウム開催

スタディスキルズを含む本学の「学生の多様化に対応した実践的技術者の育成～生徒から学生、そして社会人への成長をサポート～」の取り組みが平成16年度の文部科学省の特色ある大学教育支援プログラムに採択された。その事業の一環として、2005年2月18日に新入生教育をテーマに高知市内でシンポジウムを開催した。①本学玉置寛教育講師による「高知工科大学における新入生教育の取組についての報告(SSの実施概要)」、②本学社会システム工学科1年越智淳君及び知能機械システム工学科2年福井眞吾君による「スタディスキルズ履修者からの報告」、③今井順一千歳科学技術大学講師による「高大連携によるE-Learning開発と新入生教育の実施例」、④岡谷英明高知大学教育学部助教授による「高知大学における新入生教育の現状と課題」、⑤谷口一雄大阪電気通信大学教授による「大阪電気通信大学における新入生教育の事例」の各報告が行われた。また本学坂本明雄教育本部長の司会により、「多様化した新入生に対応する教育改革」をテーマに、パネリストとして今井、岡谷、谷口各氏のほか、長崎政浩氏(高知県教育委員会事務局高等学校課学校教育班指導主事)、山本悟氏(大同特殊鋼株式会社前人事部長)及び丹羽昭男(本学教育講師)を加え討論会を行った。(図8-1)

各大学での実践事例を含め、実社会で必要なコミュニケーション能力や人間力をいかに育成するかなど、また高大連携、産学連携等について活発な討論が行われた。大学及び高校関係者、企業及び一般からの参加者から多くの賛同と励ましのご意見を頂いた。この結果を今後のスタディスキルの講義に反映していきたい。



図8-1 新入生シンポジウム状況

## 9. 今後の課題

上記新入生教育を更に効果あるものとするためには、1年生前期の講義だけでなく、その後も引き続き指導を各学科の教員とともに推進することが望ましい。現在は3年生のキャリアプランの醸成をアシストすることから始めているが、社会人経験者が多い教育講師に相応しいと考える。また、1年次に指導した学生が2年生、3年生になったときに、個々の学生の特性を細かく把握していることを指導に生かすことも出来る。これらを手始めとして、特に学力以外の面で学生の成長をアシストし、学生及び社会の期待に応えるとともに、「学生の面倒見の良い」という本学の評判をますます高めることにも貢献していきたい。更に成果の分析を進めるとともに、他校の取り組み例なども参考にしながらブラッシュアップを続け、大学として学生や社会のニーズにより的確に応えてゆくように改善を進めていきたい。

## 10. あとがき

スタディスキルズを含む新しい教育の取り組みが始まって2年を経過した。本報告ではこの2年間に総括し、スタディスキルズの導入教育としての取り組みの概要、得られた効果と問題点、今後の課題について概括してきた。さらに、チャレンジ講座、新入生教育シンポジウム、企業見学会等のイベント企画も実施してきた。

我々教育講師は、SSに関する業務以外にも、各所属教室の構成員として、また高知工科大学の教員として、さまざまな活動を展開している。2004年度は、SS以外の講義、学科支援、課外活動の顧問、地域貢献などで多くの活動を行っている。

今後に向けて課題はいろいろ残されているが、

- ・スタディスキルズ1、2の教育内容の一層のブラッシュアップ
- ・学力以外の面で更に学習及び就職への意欲を持たせるための工夫
- ・とくに「ものづくり」を通じて達成感を体験させる取り組みの実現方法・体制・効果の見通しの検討
- ・スタディスキルズなどの教育効果の評価手法の確立

などに順次取り組んで行きたい。またトライしないと成否を判断することが困難な分野でもあるので、引き続きいろいろの新しい試みに挑戦して、ひとりでも多くの「社会に貢献する人材」を送り出せるように、教育講師として努力を続けたい。

2007年問題といわれる大学全入時代の到来は、より一層多様な学生を大学に迎えることとなる。新入生教育は大学にとってますます重要な課題と思われる。また企業からは、より「質の高い学生」を要望されている。2つの狭間で大学の教育力が問われている。基礎学力に加え、基礎生活力、コミュニケーション能力、問題に対処できる力を持った人材を育成することが求

められている。実社会で生き抜く力、耐力ある人間形成を図っていくことが望まれており、新入生教育はその第1歩となる。

最後に、SS教育の纏めをされている教育本部長坂本明雄教授、就職センター長河田耕一教授をはじめ関係者の方々に御礼申し上げます。

## 文献

- (1)河田耕一,“工学系教育と社会のつながり,” 2003年精密工学会春季大会,2003
- (2)河田耕一,“大学としての「人間力」教育,” 2004年精密工学会春季大会,2004
- (3)永井博之,伊藤綱男,“入学時導入教育「ス

タディスキルズ」について,” 2004年土木学会四国支部技術研究発表会,2004

- (4)丹羽昭男,“新入生への「スタディスキルズ」の講義,” 2004年精密工学会第9回メカトロニクスワークショップ,2004

- (5)山口信次,原田淳,河田耕一,“新入生への「スタディスキルズ教育」の2年目の進化,” 2005年精密工学会春季大会,2005

- (6)教育講師室,“2004年度 スタディスキルズ実施報告書,” 新入生教育シンポジウム, 2005年2月10日

- (7)教育講師室 “2003年度スタディスキルズ実施報告書,” 2004年3月26日